

本来でしたら、春の訪れと主の復活という二重の喜びの中で発行するはずのこの「タリタ・クム」第6号（復活祭号）が、今回は「東北関東大震災」という未曾有の自然災害と原発の損壊による放射能汚染という、かつてない危機的な状況の中でお届けしなければならないことたいへん残念に思います。亡くなられた多くの方々の永遠の安息と、被災者の皆様の癒しと仙台教区の日も早い復興を心から神様に祈り、また私たちにできる具体的な支援・サポートは何かを考えながら。

ニュース 「日本カトリック映画賞」受賞作の長崎上映会開催

2009年度日本カトリック映画賞受賞作品「風のかたち（伊勢真一監督）」の上映会が、11月21日（日）、長崎カトリックセンターにて行われました。企画されたのは、今年3月までカトリック中央協議会におられ、シグニス ジャパンの活動を共にして下さった下窄英知（しもさこ・えいち）神父様です。東京からはシグニス ジャパン会員2名が参加しました。当日は、関係者全員でスクリーンを吊り、会場準備をして、温かな雰囲気の“手作りの映画会”となりました。午後2回の上映後、それぞれ伊勢監督に短い講演をしていただき、入場者数は合計約200名、長崎らしく修道服のシスター方が印象的でした。監督の講演の中で、「病気で亡くなったお子さんも、今、こうしてスクリーンの中から、私たちにメッセージを送り続けてくれている」という言葉に、胸が熱くなり、まさに今、福音が私たちに届けられていると思いました。

終了後の交流会では、美味しい郷土料理をいただき、監督も長崎の信徒の皆さんと楽しく歓談されていました。これからも、積極的に地方での上映会を開催し、多くの方と映画を通して分かち合いのできることを願っています。興味のある方は、ぜひシグニス ジャパンまでお問い合わせ下さい。（泉塩子）
 長崎大司教区のページ <http://www.nagasaki.catholic.jp/>



ミニミニ メディアリテラシー 「クリスマスの贈り物」

街のあちこちに、きらびやかなイルミネーションがまたたく季節が巡ってきました。その内包するモチーフの豊かさの故でしょうか。昔からクリスマス（Christmas）は、小説、映画、お芝居とさまざまなジャンルで取り上げられてきました。クリスマスといえば、3人の博士（賢者）の伝えが思い浮かびます。救い主の誕生を告げる星に導かれて、異国から高価な贈り物を携えてはるかなベツレヘムまで長い旅を続けた東方の3博士たち。古い伝えによれば彼らの名はカスパル（Caspar）、メルキオル（Melchior）、バルタザール（Balthasar）で、マギ（magi）と呼ばれる占星術の専門家だと言われています。

ところでこの3人以外にもう一人、救い主誕生の啓示を受けた賢者のお話があります。「四人目の賢者」です。彼の名はアルタバン。ベルシャの高名な医師にして学者、そして著名な祭司でした。最愛の妻子を失ってから長年生きる意味を探し求めてきた彼は、星の運行によって古い預言書に記された救い主の降誕を知ります。ためらうことなく全財産を売り払い、その価で贈り物とするサファイア、ルビー、真珠の宝石を買い求め、主を探し求める旅に出立します。途中、見も知らぬ病気の老人を助けたり、ヘロデ王の兵士に殺されそうになった赤ちゃんを救ったり、強盗に襲われたり、奴隷に売られる寸前の少女を救ったりしているうちに、大切な宝石をすべて失います。いつしか33年もの月日が流れ、自身も老いて病に臥す身となったアルタバンはようやくイエス様を探し当てます。しかしそれは十字架上の主でした。絶望の中で息絶えようとしたまさにその瞬間、イエス様が現れ、驚くべき真実を彼に告げるのです。この話は「4人目の賢者（THE FOURTH WISE MAN）」というタイトルでビデオ化もされています（1994年／女子パウロ会）。

主演の賢者アルタバンを、映画「地獄の黙示録」で鬼気迫る迫真の演技を披露した個性派俳優マーチン・シーンが演じているのも興味を引きます。著者は、19～20世紀にかけて活躍した有徳の教育者にして聖職者（長老派教会牧師）のヘンリー・ヴァン・ダイク（1852-1933）。この季節、ぜひご覧になることをお勧めします。ドイツのケルン大聖堂の保護聖人としても崇敬を集めている3博士の拝礼の旅は、童謡「月の砂漠」を連想させる何か詩情に満ちたメルヘンチックなものを想起させますが、そこに秘められた意味には深く厳しいものがあります。単調な日々の生活の中にあっても希望を失わず、救い主を渴仰して祈り続ける信仰。「時のしるし」を知るや、すべてを投げうって神を探しに出る勇気と果敢さ。「砂漠の旅」といういつ果てるとも知れぬ巡礼を黙々と続ける忍耐と克己心。そしてそれらのすべてに優る慈愛のわざ……。さあ今年のクリスマス、私たちはどのようなプレゼントをイエス様に差し上げるのでしょうか。



震災から 6 日目の 3 月 17 日（木）、仙台に入るには山形か新潟からバスがあるとのこと、ルートを模索していたところ、SIGNIS メンバーの手配で山形空港行きが可能となる。あらため感謝します。当日は被災地に追い打ちをかけるがごとくの寒波が襲来した。積雪のため山形空港上空を待機してようやく着陸できたのは 1 時間遅れであった。空港から山形駅へ、山形駅で仙台行きのバスに乗り込み、仙台には 19 時過ぎに到着した。仙台駅は震災の影響で真っ暗だ。市内もお店などが閉店していて被害の大きさを予感させた。タクシーは稼働していたのでそれに乗込み SIGNIS 仙台のメンバーから依頼のあった聖ウルスラ修道会に到着した。SIGNIS のメンバーが迅速に集めてくれたホッカイロ、乾電池などカバンいっぱい詰め込み、地震でストーブなどが使えず震えているシスター達に届けることができた。

翌朝、SIGNIS の仙台のメンバーが探してくれていた叔母の所に行き生存を確認し、その足で、若林区荒浜地区へ向かった。遠くに見える松林の向こうが 200 ～ 300 人の遺体が浮いているといわれる荒浜地区。手前側は田んぼであり、津波にあらゆるものが押し流された後である。泥沼と化していた。「高台に避難をしろ」と行政から呼びかけられても、どこに高台があるのだろうかという、一面田んぼの地区であった。いったい、何割の人々が避難できたのであろうか？

若林区を後にして名取川の河口の閑上（ゆりあげ）地区へ向かう、ここは名取川から津波が逆流して田畑、家、車を押し流して、道路の下で破壊された所である。（写真 2）

閑上大橋を渡り、閑上港に向かう。コンクリートでできた漁業組合の市場の躯体だけが無残にのこっていて、後は家の土台のみとなった漁港である。この岸壁は釣り客には人気があるそうで、遠くからもね釣りに訪れる所だそうだ。当時どのくらいの人が釣りや仕事をしていたのだろうか？ その人達は無事に逃げられたのだろうか？ まったく人気がなくなった漁港に言葉もなく立っていた。



◀ 閑上港の魚市場跡

▶ 閑上港内の建物。土台のみが残った



若林区荒浜地区



望む下を土手から閑上大橋のか架に名取川



SIGNIS JAPAN とは

SIGNIS とは、世界 140 カ国に広がるカトリックのメディアに携わる人々の世界組織です。平和文化の促進、人間の尊厳擁護。子どもの権利擁護が近年のテーマです。司祭、修道者、一般信徒が参加しています。映画、放送、視聴覚、最近ではインターネットを活用した福音宣教に力を入れています。日本では、サンパウロ、女子パウロ会、カトリック中央協議会・広報のほか、ボランティアの信徒が積極的に活動しています。カトリック映画賞、インターネットセミナーのほか、これからはインターネット放送局（SNN）への取り組みなど、さらに活動の幅を広げていきたいと考えています。



第 43 回日本カトリック映画賞の授賞式で幸田司教からトロフィーを受け取る伊勢監督



インターネットセミナー風景

賛助会員になってください！

私たち SIGNIS JAPAN の活動をサポートしてくれる賛助会員を募集しています。年会費は一口 3000 円。ご入会いただける方は、氏名、住所、連絡先を下記にお知らせください。年会費およびご寄付は、銀行口座または郵便振替口座にお振込をお願いいたします。

銀行振込 三菱東京 UFJ 銀行 六本木支店
普通 1679019

SIGNIS JAPAN 代表 千葉茂樹
郵便振替 口座番号 00100-0-594547
口座名称 SIGNIS JAPAN

代表者 千葉茂樹
連絡先：〒 107-0052 東京都港区赤坂 8-12-42
女子パウロ会内 SIGNIS JAPAN
info@signis-japan.org http://signis-japan.org/